

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2012年12月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.10 < 貴塾にはありますか? 『授業の形』を! >

前回は口コミを発生させるための具体的手法をご紹介いたしました。貴塾ではクリスマスカードの作成は行われたでしょうか?

さて、このシリーズ、ここまで運営的・集客的な内容が続いてきましたので、10回となります今回は「授業」について考えてみましょう。

まず、ある塾で授業見学をしたときのことをお話したいと思います。小5・6年の中学受験クラス、算数・国語・理科の集団指導の授業です。7人の先生の授業を以前見学しました。そのときに気付いたことを以下に記しますが、どの塾にもあてはまる可能性があると思います。

まず、授業で共通していたことは、号令がないことです。号令は、休み時間と授業を分ける通過儀礼ですが、見学した授業では、休み時間と授業の間にメリハリがありませんでした。先生が来て、出席を取ることなく授業がスタートします。だから、緊張感がすぐには出ることはありません。数分たつてようやく緊張感がもたらされるのです。

その次に共通していたのが、授業にノートを必要としないことでした。プリントを教材として使用していたのですが、そのプリントにだけ書き込ませればよいと思っていたのです。生徒は、作業をすることがあまりありませんから、考えたことが定着しません。通常であれば、ノートに作業をしながら生徒は考えていきます。また、ノートがないので、後で授業を振り返ろうとはしないはずで。

そして、これが一番重要なことですが、授業の中で生徒に「思考を要求する」ことがとても少なかったのを覚えています。国語ならば、本文の理解を深めるために、教師が要所所で、発問をして、生徒に考えさせるはずですが、その発問がほとんどありませんでした。「『それ』は何を指している?」、「この一文はある言葉の言い換えだけど、その言葉が何だか分かる?」といった発問です。

それよりは、設問に対する注意事項が多く、正解を重視し、思考プロセスをあまり重視していないようでした。残念ながら、分かっている生徒には退屈で、分からない生徒には、ほとんど身にならないような授業が多かったのです。

算数では、先生独自の類題や例題がなかったので、プリントの解説をして、すぐに違う問題に移行します。定着させるまでの「仕掛け」がありません。実績がなかなか出ないもの分かるような気がしました。

それでは、どのような授業を行えばよいのでしょうか。授業で大切な10カ条を書き出してみましょう。

1. 授業と休み時間を明確にする → 号令を書け、出席を取る。
 (個別指導でも授業の始めには全体に向けて号令をかけ、はじめをつけることが可能です。)
2. テキストを教えるのではなく、テキストで原理原則を教える
 → 教師が生徒の能力に応じたストーリーを考える。

3. 解説を定着するための仕掛けを用意する
 → 生徒に合わせた類題・例題を用意する。
4. 要所所で、教師が発問をして、いつでも緊張感を保持する
 → 思考作業を随所に入れる。
5. 授業の段取りを工夫し、ノートを取らせる
 → 作業を多くし、定着させる。
6. 演習に制限時間を設ける
 → 緊張感を醸成する。レベルに応じて時間を変える。
7. 指名は、ランダムにし、誰が指されるか分からないようにする
 → 緊張感を保持する。
8. 生徒に対する承認活動を活発に行なう → 生徒に自信を与える
9. 話や解説のテンポを意識し、単調にならない
 → 生徒を惹きつける話し方を工夫する。
10. 生徒のペースに乗らない
 → 生徒の対応を、メリハリをつけて行なう。

授業に臨むにあたって、当然、教材研究をするのですが、その中で、生徒の躓きそうところをまず発見し、その躓きそうところをどう処理するのかを教師は考えた方がよいでしょう。学力の低い生徒・クラスであれば、前もってその躓く箇所を教えるでしょうし、学力の高い生徒・クラスであれば、わざと失敗させ、生徒にどうして失敗したのか考えさせて、それから教えるようにするでしょう。クラスや生徒に応じて考えて下さい。

授業の構成を塾として考えることは非常に重要なことです。来期に向けて上記の10カ条を参考にして、授業構成を考えてみて下さい。人気が出る授業と学力の高まる授業は、相反しないはずで、是非、二兎を追って下さい。

【あとがき】
 今回は授業についてお伝えしましたがいかがだったでしょうか。塾は何と言っても「授業」です。当然ですが、ここが高品質に保たれてこそ他の業務が活きてくるのです。弊社は即効性の高い授業研修が得意です。まずはお気軽にご相談を。いつものように宣伝でした。(笑)
 さて、冬期講習も間近に迫って参りました。ぎりぎりまで問合せが発生するケースが夏期講習でも散見されました。最後まであきらめずに集客活動を踏ん張って下さい。今年も残すところわずかですね。皆様、良いお年を! 2013年にもよろしく願いいたします。
 ・お問合せ: TEL 045-651-6922
 ・Mail: mailadm@management-brain.co.jp

人が何かを魅力的に感じる根底には何があるのでしょうか…ギャップです。例えば長島茂雄氏。あの天才的なプレーと天然キャラ?のギャップに人は魅せられます。例えば北野武氏。コメディアン的一面と、俳優・監督としてのシリアスな一面のギャップが人を魅了します。我々が自然の美しさに感動するのも、日常生活とのギャップを感じるからです。

私はコアとデコレートというテーマでお話をするがあります。塾にとってのコアとは、言うまでもなく授業であり、教師であり、カリキュラム（教材を含む）です。これを大切にしない塾は存続できません。いわゆる必要条件です。ところが、それだけで魅力的な塾にすることは難しい。そこに様々なデコレート、つまりギャップを生み出すことが必要なのです。そのギャップが大きければ大きいほど、外（市場）から見れば魅力的な塾ということになります。

クリスマスが近づいてきました。ちょっとしたイベントを考えている塾も多いと思いますが、中には「クリスマスは勉強とは関係ない」と、何の企画も立てていない塾もあります。「勉強とは何の関係もない」のはその通りです。でも、だからこそ気楽に楽しんで行なうことでギャップを作り出すべきです。

私が塾経営をしていた頃、12月24日の扱いには苦労したものです。当塾は個別指導専門塾だったので、大量の学生講師を採用していました。ところが、当時はまだバブルの名残があり、学生達がクリスマス・イブに働くことを嫌がったのです。また、各家庭でも家族で過ごすことを優先するところが多く、欠席率が高いというのも悩みの種でした。そこで私は、当日の通常授業をやめ、社員教師だけによる特別講座を企画しました。来るのは、何かの事情で家族パーティーのできない家庭の子供たちです。電飾で飾ったツリーと、お菓子問屋で袋詰めしてもらったお菓子を用意して生徒たちを迎えました。少しでもクリスマス気分を味わってもらおうとしたのです。ささやかなパーティー?の後、冬期講習のイントロダクション講座を行ないました。参加した生徒の保護者から大変感謝されたことを覚えています。

先日、ある勉強会で「せめてクリスマスカードくらいは贈りましょう」と提案し、合わせて、「バースデイカード」「母の日・父の日カード」等、いわゆる塾のデコレートについて提案しました。すると、ある塾長からこんな質問が寄せられました。「父の日に感謝のメッセージを生徒に書かせるということですが、母子家庭のところはどうすればいいのでしょうか」

確かに、今では母子家庭どころか父子家庭も珍しくありません。離婚率が3割を超えている現在、そうした社会環境に配慮するこ

とは重要です。ただ、だからと言って、全てを捨て去ることはお勧めできません。

我々は、周りからの批判を恐れて「最大公約数」を求める傾向にあります。6と4の最大公約数は2です。ここに3が加われば最大公約数は1になってしまいます。確かに公平を追求すれば、「何もしない」のが最も公平と言えるでしょう。しかし、それで魅力的な塾ができるとは思えないのです。

上記の例で言えば、今、身近にいない父親に対する「感謝の言葉」を書かせることに批判する人はいるでしょう。ここに、理論武装の必要性があります。

私事で恐縮ですが、私の父親は私が中学2年生の時に死去し、それ以来、我が家も母子家庭です。私の父は、右の親指がありませんでした。戦争中、満州の戦場で銃弾によって吹き飛ばされたのです。親指のない兵士は戦場で使い物になりません。本国に送還されることになります。ところが、その帰国船が空爆を受け、船が沈没を始めます。皆が海に飛び込んで逃げる中、もともと泳ぎが得意ではなく、また、手の使えない父は、覚悟を決めて沈み行く船の甲板にもたれ、最期の煙草を吸っていたそうです。すると、傾いて沈み始めた船が岩礁にぶつかったのか、（理由は分かりませんが）沈没を免れました。海に飛び込んだ仲間達が皆、爆撃を受け戦死する中、父は奇跡的に助かり日本へと帰って来ました。あの時、父が戦死していたら…今の私は存在しません。

両親に対しては、「いてくれるだけでありがとう」「産んでくれてありがとう」です。離別・死別に関わらず、父親がいてくれたから君がいる。どんな父親でもいてくれた、そして君を産んでくれたことに感謝しなければならない。その感謝の言葉をメッセージ・カードに書こう…こうしたメッセージがあれば、（それでも批判する人はいると思いますが）多くの共鳴・共感を持って受け入れられるのだと思います。

クリスマスを契機として、塾のコアとデコレートを考えてください。ちなみに、サンタクロースの語源は「セント・クローゼ」…聖なるゲルマン民族の神様です。キリスト教世界がゲルマン民族社会に進行するとき、「ほら、あなたの信仰する神もイエス様の誕生を祝福している」という理論武装として作り出されたのでしょうか。日本における神仏習合（本地垂迹説）と同じことがヨーロッパでもあったのではないかと夢想しています。

今年も紙面を通してのお付き合い、ありがとうございます。来年が「あなた」にとって最良の年になりますように…。

個別指導形態の塾がここまで繁栄してきた背景には、成基学園（成基コミュニティ）の個別指導への挑戦を抜きには語れません。科目別には上位の成績を取るのに集団指導にはなかなかついてこれない生徒を個別に科目別にフォローしたいという思いを形にした個別指導は、最初のうちは採算もとれなく指導形態も試行錯誤を続けました。今回は、新たな進化を遂げている『ゴールフリー』（以下 GF）について検証してみます。ここでは、形態ではなく、GF の理念や人間的なしくみについて考えます。

■キーワード「自立」

「自立した人間」を育てるため、GF では、自立に必要な三つの力を大事にしています。これは「TCF サイクル」と呼ばれ、「Target(目標を掲げ)」行動し「Check(結果を見直し)」「Feedback(改善する)」という一連の流れを表します。

GF では、これを一年、一か月、そして一つひとつの授業や講座単位で繰り返していくことで生徒の目標達成を促し、自立を育成していくのです。

■キーワード「夢現」

夢のなかった生徒が、実現したい自分の夢を見つけられる空間が GF にはあります。

「夢なんて・・・」「大人になっても対して面白いこともない・・・」などと斜めに構えていた生徒たちが、本気で将来やりたい学問や仕事について考えはじめられる準備をしてあげれば、生徒たち自身で目標を設定して努力するようになります。そのモチベーション UP の絶好のタイミングを見計らうことも大事です。

■キーワード「共創」

自己のことしか頭になかった生徒たちが相手や周囲のことを考えるようにしていくこと。そして、保護者の気持ちや立場を思いやることができるようになれば、計画的な勉強をして成績をアップさせ、一つひとつの目標をクリアしていく喜びと充実した達成感をもって生き生きと成長していく。いつか「人の役に立ちたい」という気持ちが膨らみます。これは塾人として「社会に貢献できる人に育てたい」というテーマにリンクしていきます。

■H.D.S.C カルテ

GF では、『H.D.S.C カルテ』（ヒューマン・ドリーム・サポート・コーチング・カルテ）に必要事項を記入してもらって、生徒と保護者に入会の目的や将来の夢について確認しています。明確な目標を共有することで、校舎責任者であっても、担任であっても、事務職員であっても生徒についての情報確認が瞬時にできるようになります。また、生徒や保護者が自分で書き込むことではっきりとした自覚が芽生えることになるのです。そうすれば、目標達成の際の充実感もひとしおです。

■教育コーチングの活用

GF には、生徒の特性を理解した専任講師『教育コーチ』がいます。生徒の学習意欲をどんどん引き出し、目標達成を支援するのがコーチの務めです。教育 = education の語源は educe = 潜在しているものを引き出すことであり、まさに教育コーチングとは、生徒のやる気や能力を引き出すためにとても有効な最先端の教育ノウハウであり、これを成基コミュニティと GF では独自に開発しているのです。GF では、母親と父親を対象として、「パパ・ママコーチング」セミナーも開催して好評を得ています。

■エデュバイトの活用

個別指導といえば学生講師ですが、半世紀を超える歴史を持つ成基学園の卒塾生も多く GF の講師として登録し、後輩の指導にあたる人も少なくありません。そうした彼等を「エデュバイト」と呼び、アルバイトというお金を稼ぐ従来の考え方に、「自分を成長させる」という考え方をプラスすることで、自分の目標を見つけ、社会で活躍する能力を伸ばす職場環境の一員として自信をもって働くことが可能となります。実際、彼らの就職率は 100% であり、本体の成基コミュニティや GF に勤める人も毎年増えているのです。

個別教育
GOALFREE



今回は、007 のジェームズボンドでおなじみ、ショーン・コネリーです。えっ？彼は脇役じゃなくていつも主役だろって・・・確かにそうですが、色々理由があるのです。とにかく読んでみてください。

■英国人ではなく「スコットランド人」と呼びなさい

彼の本名は「トーマス・ショーン・コネリー」といい、1930年、スコットランドのエディンバラでアイルランド系の家庭に生まれました。牛乳配達の仕事をしたあとイギリス海軍に入りましたが、健康上の理由で除隊し、トラック運転手や美術モデル、工場の労働者など選り好み無く仕事をしていたようです。1953年には「ミスター・ユニバース・コンテスト」の重量挙げ部門で三位入賞した際、同じ出場者の一人に演技の道に進むように誘われ、翌年からテレビや劇団に出演するようになりました。

彼は、2000年に英国女王から「ナイト」の称号を受けましたが、スコットランドの分離独立を主張する熱烈なスコットランド国民党の支持者であり、「独立するまでスコットランドには帰らない」とまで言っているようです。

2006年に米国映画協会の生涯功労賞を受賞したのを機に、俳優業引退を宣言し、2008年の78歳の誕生日にエディンバラ国際ブックフェスティバルで自伝の出版を発表しました。

■紳士的なスパイとして

彼を一躍世界的俳優として有名にしたのは、1962年の『007 ドクター・ノオ』で演じたジェームズ・ボンド。日本でも「ダブルオーセブン」シリーズはスパイ映画の決定版となり、現在まで何度もリニューアルされたり、新たなシリーズでジェームズ・ボンドが復活したりしており、『ミッション・インポッシブル』のイーサン・ハントと共に、とても馴染み深いキャラクターとなっています。

ショーン・コネリーは、主役であっても、映画に出演する役者たちの面倒をよくみたり、ロケ先での貴重な体験を自分の「学び」として真剣に取り組むなど、研究熱心な一面を見せていました。

特に『007 は二度死ぬ』が日本で行われた際、極真空手の道場の人たちが出演の前後に熱心に練習しているのを見て感

激し、「君たちの道場に行きたい」と声をかけて、それが後日実現し、名だたる有段者の演武を見て、名誉参段が授与されたそうです。

■重厚な演技派として「トニー賞」も獲得

007 シリーズ全7作に出演したあと、様々な映画や演劇に出演し、1987年の『アンタッチャブル』ではアカデミー助演男優賞を受賞、『オリエント急行殺人事件』や『バラの名前』では高い評価を受けました。

1998年にはブロードウェイで『Art』を製作し、トニー賞演劇作品賞を受賞しています。演技派俳優として積み重ねた経験の結実といえます。

■吹き替えで定着したボンドの声

ジェームズ・ボンドの声といえば「若山弦蔵」を置いて右に出る者はいません。渋いミリミリと響く声は、スパイ大作戦のフェルプスの声でお馴染みですが、多くの声優たちの憧れともなってきました。若山氏は声優では悪役から正義派まであらゆる役柄をこなす本格派ですが、ラジオのパーソナリティの草分けとしても有名であり、1973年から1995年まで5700回も続いたTBSラジオ『若山弦蔵の東京ダイヤル 954』で生ワイドラジオ番組の長寿記録をつくりました。

それはともかくとして、スパイのボンドも黒子なら若山氏もジェームズ・ボンドの黒子として、日本人にとっては欠かせぬ吹き替え役だったのです。このように重い脇役を塾で育成できるかどうかは、今後の塾の生き残りに大事なこともかもしれません。

